

雪のころ

野村昇司作／藤島生子絵



雪のこんと

野村昇司作／藤島生子絵





●作者

野村昇司（のむら・しょうじ）

一九三三年横浜市鶴見に生まれる。

横浜国立大学教育学部心理科を卒業。

教師をするかたわら、創作活動に励む。

現在、東京都大田区田園調布小学校教諭。

著書に『希望の漂流』『水のない海』

『砲台に消えた子どもたち』『竹の三吉』などがある。

●画家

藤島生子（ふじしま・せいこ）

一九四六年福岡県に生まれる。

武蔵野美術短大美術科卒業。

その後画塾を開くかたわら、出版美術の仕事にたずさわる。

主な作品に、『きつねのこんきち』『九はんのきょうだい』『おおかみ小平太』『竹の三吉』『はしれ！ 歩道橋』ほか多数。

（＊印は、あすなろ書房刊）

雪のこんこ

*

野村昇司作／藤島生子絵

発行者 山浦常克

発行所 あすなろ書房

東京都新宿区弁天町 107 石嶋ビル 〒162

TEL (03) 203-3350／振替東京 9-63084

8393-61910-0060

それは

ずっと ずっと むかし、

いつのころだか

はつきりわからないほど

むかしのおはなしです。



雪がこんこんとふりつづいて、どこもかしこも まっ白くなりました。ひろいひろいたんぼは、ただもう、白い雪っぱらです。その雪っぱらの中に、ワラの雪がこいをした家々が ひとかたまりになって、うずくまっています。

ある日のこと、雪がふつつりやみました。里さとの子どもたちは、申し合もうわせたように 雪っぱらにとびだしました。

「ずいぶんと ふったものじゃ。」





あかいほつぺたを　ぷっくりふくらませた志乃^{しの}が、雪ぞりをひいて
社^{やしろ}の方へやってきました。

すると、大きなモミの木のある社の方から、雪だまが　志乃をねらつ
てとんできました。

志乃より三つも年上の吾太^{ごた}と、そのなかまたちです。志乃の雪ぞりを
ぶんどろうとしているのです。

ところが　とんできた雪だまは、どれもこれも　志乃の目のまえで
パッパッと　くだけてしまうではありませんか。

小首^{こくび}をかしげた吾太たちは　ぎゅんぎゅん力をこめて、雪だまをつく
りました。そして　また、志乃をめがけてなげました。すると、どこか
らか　はやてのような雪だまが　ビュビュビュンと　とんできて、吾太
たちのなげた雪だまを　またたくまにうちくだいてしまいました。



「だれだ!!」

吾太^{ごた}がさけびました。そのとき 志乃^{しの}と同じ年の太一^{たいいち}が、六地藏^{ろくじざう}のふきだまりの上で 雪だまをにぎりしめている男の子を見つけました。

どこの男の子でしょう。まだ、だれも見たことがありません。このさむいのに もんぺもはかず 着物^{きもの}のすそから白いひざこぞうをのぞかせ、雪ぐつもはかずに立っていました。

「やっちまえ!!」

吾太の命令^{めいれい}で 雪だまが男の子めがけてとびました。けれど 雪だまは、六地藏のふきだまりをこえて、雪っぱらの中へ すぼんすぼんともぐりこんでしまうだけです。

それをみていた志乃は、けたたたとわらいだしました。ふきだまりの上には、雪がしゅるるんとまいあがっているだけで だれもいなか

ったからです。

わらわれた吾太^{ごた}たちは、志乃^{しの}のところへ走ってきました。

「おい、どこへにげたか おしえろ!!」

おしえろといわれても志乃だって、男の子がどこへかくれたのか知るわけがありません。

そこへ また雪だまがとんできました。モミの木のあたりからです。

「あんなところに おるぞ。」

吾太たちは すばやく雪だまをにぎりしめると、社^{やしろ}の方へ走りました。そして、社の鳥居^{とりい}の下で 吾太が大声でさけびました。

「おまえは このあたりじゃ見かけんが どこのもんじや。」

すると、雪だまが一つ、ひゅうと、北の空へむかってとびました。

「おまえは どこからきたんじや。」

太一^{たいち}もききました。するとまた、雪だまが一つ、ひゅうと北の空へむ

かってとびました。

「おまえのうちは あっちか。」

と太一が 雪だまを北の空にあげました。太一のなげた雪だまは、またたくまに男の子のなげた雪だままで うちくだかれてしまいました。

志乃^{しの}は、その雪だまをなげる男の子の あまりにも早いなげわざにふと、雪のこんこではないかしらんと思いました。

雪のこんこは、雪がこんこんとふりつづいたそのあと、雪の中から生まれてくるというのです。つめたい こおりつくようなからだをしているというのです。雪のこんこは、火にあたると、からだがとけてしまうというのです。雪のこんこに出会^{であ}ったとき、「おまえは、雪のこんこか。」とたずねると、その場^ばで雪のこんこはきえてしまうというのです。

そればかりか たずねた者^{もの}までいっしょにきえてしまうというのです。

吾^ご太^たたちだって、雪のこんこの話は知っていました。でも だれもまだ雪のこんこを見たことがないのです。雪のこんこの話をしてくれた志^し乃^ののおじいさんだって、雪のこんこを見たことはなかったのです。

吾^ご太^たたちは、なかまをよびあつめてきました。男の子をつかまえようとしているのです。

二

吾太^{ごた}たちは、モミの木をとくからとりかこみました。男の子がモミの木の右がわによれば、吾太たちの輪^わも右により 左にまわれば 輪も左にまわって、輪はだんだんちぢまっていきました。

志乃^{しの}は助^{たす}けてあげたいと思うけれど、どうすることもできません。ただ雪ぞりをひきずって、社^{やしろ}の中でうろうろするばかりです。

ちょうど そのとき、まずしい身なりをしたおじいさんが鳥居^{とりい}の下で手を合わせました。



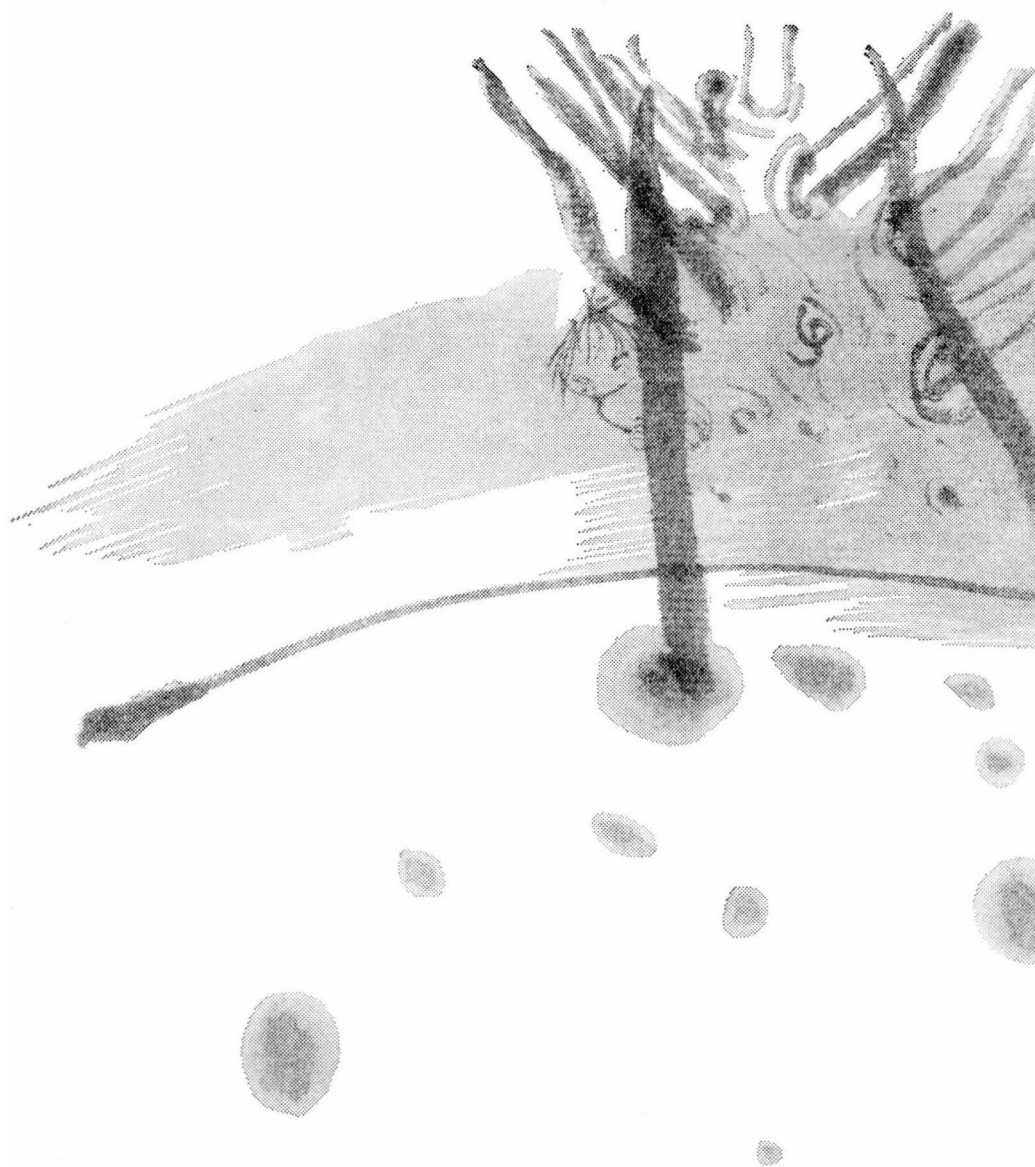
かみの毛は、雪のように白く、その毛は、耳からあごにかけて長くのびていました。黒い目が白いまゆ毛の下で、獲物えものをねらうオオカミのようにするどくひかつていました。

じつは、このおじいさんは「源げんじい」といって、雪のふる中にあらわれ、雪のふる中にきえていく、ふしぎなおじいさんだったのです。里さとからすこしはなれた、山のふもとの雪の林の中で、ひとりでくらしていたのです。里ものの者からは、「かくれ里ざとの源げんじい」とよばれ、人間の生いき血ちをすって生きているといわれ、たいへんおそれられていました。

「かくれ里の源げんじい」の話は、志し乃も知っていましたが、まさか 今、目の前にいるおじいさんが「かくれ里の源げんじい」だとはゆめにも思わなかったのです。

「ねえ、じい。あの男の子を助たすけてあげて。みんながいじめているの。」





志乃は、源じいにとりすがるようにいいました。けれど、源じいは、耳をかたむけるどころか、ふりむきもせず、ゆっくり歩いて社殿の前へすすみました。

源じいは、しょっていた箱を、雪の上におろすと、また手を合わせました。

その源じいの姿を最初に見たのは二平でした。二平は、がたがたふるえて、吾太にしがみつきました。

「どうしたんじゃ。」

と、吾太にきかれた二平は、まっさおな顔で、源じいの方をゆびさしました。そのとたん、

「にげる!!」

吾太がさけびました。